

Fitzgerald 文学における民族・人種差別*

内田 勉

F. Scott Fitzgerald の作品を読んでいると、人種差別的言辭が目についで、当惑することが珍しくない。但し、人種差別と言っても、Fitzgerald 文学の場合には、黒人種や黄色人種だけが差別の対象だったのではなく、白人主流派にとって、他者と受け止められた民族（例えば、南欧人・ユダヤ人等）に対する差別感も顕著であったから、本論では、黒人を主とする有色人種に対する差別を人種差別、ユダヤ人等に対する差別を民族差別として、分けて考えることにする。このように分けて論じる必要があるのは、同じ差別と言っても、差別感の背後にある作家の意識は、黒人等に対する場合とユダヤ人等に対する場合とでは、明らかに異なっていると考えられるからである。

まず、民族差別の問題から論ずるが、Fitzgerald 文学における民族差別の最初の顕著な例は、出版された最初の novel となる *This Side of Paradise* の中に現れる。第一次世界大戦にアメリカが参加し、主人公 Amory Blaine の在学するプリンストンでも、軍事教練が毎晩のように行われるようになった時期のことであるが、ワシントンから帰る Amory は、寝台車が「ギリシャやロシア出身の体臭の強い移民でいっぱい

*本稿は、学習院大学で開催された日本英文学会第73回大会における研究発表（「Fitzgerald 文学における人種・民族差別」2001年5月19日）を基にしている。本稿では題名を若干変更し、表現を改めた所もあるが、同一の趣旨である。又、発表当日は、bibliography を別にして16枚のハンドアウトを参照したが、本稿では参照した部分を本文の中に組み入れた。

い」なのを見て、参戦に伴う昂揚感が、たちまちの内に不快感に変ずるのを覚えたという場面がある。続いて、「こういう連中と一緒にされて愛国心など持てるのか」という Amory の心中の思いが描かれ、幻滅感と失望で、彼は、眠れぬ夜を明かしたとなっている。⁽¹⁾ 更に、プリンストンに戻った Amory は、平和主義者の友人に反駁して、平和主義の理想を唱える連中は、「ドイツとユダヤの名前を持った臆病者にすぎない」(p. 140) と、ユダヤ系アメリカ人のことを誹謗している。つまり、大戦参加を機にして、アメリカの一体感というものが、かつてなく喧伝された時だけに、アメリカ内における異質な民族の存在が、それだけ強烈に意識されることになるのである。

これは、あくまで作中人物の台詞であり意識であって、作家自身のものとは異なるという考え方もありうるが、この場合、あまり説得的でないように思える。なぜならば、Fitzgerald は、この作品や他の初期作品において、主要人物に、同様の民族差別意識を繰り返し持たせているからである。Fitzgerald 自身も、Amory と同様の差別意識を持っていただろうと考えられる更に明白な理由を挙げると、*This Side of Paradise* は、モラルを問題にする小説といてよいほど、Amory の様々な人間的欠陥や弱点が批判的に描かれているにも拘わらず、彼が時々露わにする民族差別だけは、作中で、一向に、批判の対象にはされていないからである。

Fitzgerald 文学に見られる民族差別において、一番大きな問題が、ユダヤ人差別である。この問題は、研究史を調べると、思いの外、早くから指摘されていて、これを本格的に扱った最初の論文は、Milton Hindus というユダヤ人研究者が、既に 1947 年に発表している。しかし、Hindus が批判的に扱ったのは、*The Great Gatsby* のみで、その中に出てくるユダヤ人 Meyer Wolfshiem の描き方を問題にして、「この作品は

(1) F. Scott Fitzgerald, *This Side of Paradise* (The Cambridge Edition), p. 139. 以下、同書からの引用は本文中にページ数のみ示す。引用文の日本語訳は引用者による。

anti-Semitic documentとして読める」と批判するのである。⁽²⁾ Hindusは、*The Last Tycoon*のMonroe Stahrにも言及し、そこにFitzgeraldの変化と成長を認めているが、論全体としては、ユダヤ人差別に関し、厳しいFitzgerald批判となっている。

私にとって意外なのは、Fitzgerald文学におけるユダヤ人差別を扱った研究は、殆どの場合、Wolfshiemを取り上げ、結果的に、Hindusによる批判と同じパターンになっていることである。Hindusは、ユダヤ人を悪人として描くことが差別的なのではなく、ステレオタイプとして描くことが差別的なのであると言っているが、確かに、Wolfshiemの描き方には、ステレオタイプのところがある。（例えば、Wolfshiemの容貌や動作を描く時、ことさら鼻を強調する等）。しかし、アメリカにおいて差別され、又、畏怖されるユダヤ人のイメージというものは、Wolfshiemが我々読者に与えるものとは、非常に異なるのではないか、というのが私の実感である。Wolfshiemは暗黒街の顔役なので、それが彼を遠い存在、つまり、他者にしてしまう最大の理由となってしまう、そのため、ユダヤ人であるが故の他者性という問題が、Wolfshiemの場合には、見えにくくなっているのではないか。従って、彼がユダヤ人であることは、作品の中で、本質的な意味を余り持たない、ということになるのではないだろうか。

私には、Fitzgerald文学におけるユダヤ人差別の問題を扱う時に、最重要、かつ、不可欠な人物は、二作目のnovelである*The Beautiful and Damned*に登場するJoseph Bloeckmanだろうと思う。このユダヤ人の名前は、従来、日本語では、ブレックマンと表記されていたが、作品の中で、彼の憧れる女性Gloriaが、彼をBlock-houseとかBlockheadと呼んだりしたとあるので、⁽³⁾ 作中では、ブロックマンと発音されていた、

(2) Milton Hindus, "F. Scott Fitzgerald and Literary Anti-Semitism: A Footnote on the Mind of the 20's," p. 508.

(3) F. Scott Fitzgerald, *The Beautiful and Damned* (Oxford), p. 82. 以下、同書からの引用は本文中にページ数のみ示す。引用文の要約と日本語訳は引用者による。

と考えてよいと思う。

この作品は、内容を煮詰めて言うと、上流階級に属する Anthony Patchが、自分の妻 Gloriaを奪おうと画策する、最底辺からたたき上げのユダヤ人 Bloeckmanと最後的に対決し、妻は奪われなかったものの、男としての面目を失ってしまうという物語で、*The Great Gatsby*における Tom・Daisy・Gatsbyの三角関係と非常に似た結構を持っている。但し、明らかに異なる点は、*The Great Gatsby*においては、作者のトラウマを表現するのが、妻を狙われる Tomではなく、彼の妻を奪い取ろうと目論む Gatsbyであるのに対し、*The Beautiful and Damned*においては、それが丁度逆の関係になっていて、人妻を狙う Bloeckmanは終始敵役にすぎず、作者の心情や意識の多くが投影されているのは、最後的人格破綻者に落ちてしまう Anthonyの方であることである。しかし、それにも拘わらず、この作品においては、Anthonyの敵役 Bloeckmanがユダヤ人であることが、プロット構成上の要になっている。ここで、主人公 Anthonyの敵役が、なぜ、ユダヤ人でなければならなかったのかについて考えてみたい。

The Beautiful and Damned 第1部第2章冒頭のパラグラフは、New Yorkにおける金持ちの娘達が、社交界にデビューするシーズンの到来を告げる場面であるが、白人社会がピラミッド型の階層を成し、その中では、結婚を梃子にして、上の階層に上がることもできるが、ユダヤ人は、たとえ金持ちであっても、ユダヤ人の社会の中でしか mobilityがないということになっている (p. 30)。これが、*The Beautiful and Damned*の中で、最初に前提されている社会秩序なのである。しかし、この作品は、同時に、この秩序が大きく揺らぎ始めていると、上流階級に、危機感を持って、強く意識され始めた時代であることも描いている。New Yorkのダウントウンを歩いている Anthonyがユダヤ名を持った店の多いのに気付いた後の描写で、“New York—he (Anthony) could not dissociate it now from the slow, upward creep of this people” (p. 222)とあるのは、Anthonyが、New Yorkにおけるユダヤ人の社会的上昇を強烈

に意識していることを表わすものに他ならず、彼の属する階級のまさしくこうした危機感を反映したものと言える。

*The Beautiful and Damned*のヒロインGloriaの主催するディナーの席で、Anthonyと彼のHarvard以来の友人達の前に、Bloeckmanが初めて立ち現れた場面では(p. 78)、Bloeckmanは、Anthonyたちの冷たい、皮肉を込めた視線を浴びることになる。それは、Bloeckmanが学歴も家柄も持たないユダヤ人であるという徹底した他者性故であった。そして、他者でありながら、成り上がり者として上流社会に侵食し、上流を脅かす存在、そういう存在の典型としてユダヤ人が考えられた、ということである。

ユダヤ人に対するそうした強迫観念は、AnthonyとGloriaの恋愛関係の中にも不気味な影を落とすことになる。Gloriaの不興を買って、悲嘆にくれるAnthonyが、突如として、Bloeckmanを自分のライバルとして意識する場面がある。Bloeckmanが、Anthonyに代わって、Gloriaと結婚する可能性が有り得る。しかし、それは、Anthonyにしてみれば、とんでもない厚顔無知(hideous presumption, p. 97)と言わざるを得ないことなのである。ユダヤ人Bloeckmanに対する侮蔑の最大級の表現として、Anthonyは、Bloeckmanをhog(p. 102)になぞらえている。

貧窮のどん底に落ちたAnthonyが、週末を食いつなぐための金を、酒に酔った勢いで、Bloeckmanに借りに行った所、結局、醜悪な口論になってしまい、Anthonyが、インテリのプライドとして、これまで抑えに抑えていた禁句を、遂に、口にしてしまう場面がある(p. 340)。面と向かって、“you Goddam Jew”と言われた瞬間に、Bloeckmanも切れてしまい、これまででは、どんなに冷淡な視線を浴びようとも、平然として、紳士としての振る舞いを常に演じてきたBloeckmanが、ここで、これまでのポーズをかなぐり捨て、Anthonyを殴り倒し、それでも怒りは収まらず、ホテルのボーイに、「この浮浪者(this bum)」を「外に放り出せ」と命じている(p. 341)。

Roulstonという研究者は、Fitzgeraldの作品について優れた論文を書

き、*The Winding Road to West Egg*という論文集にまとめたが、*The Beautiful and Damned*については、大変な読み違いをしている。Roulstonは、この論文集の中で、AnthonyとBloeckmanとの最後の対決場面に言及し、「AnthonyにGoddam Jewと言われた時、Bloeckmanは、dignityを以って立ち向かった」と述べているが、⁽⁴⁾この対決場面では、両者とも、dignityを失ったというのが、テキストの正しい読み方である。Bloeckmanが、この場を去る時、ことさら、dignityを意識したというのは(p. 341)、本当の意味では、dignityを失ったということを表わしている筈である。

Bloeckmanを過大評価するRoulstonは、また、BloeckmanとMonroe Stahrとの類似点を強調する(p. 99)。二人とも、たたき上げのユダヤ人で、映画プロデューサーとして成功を収めたのだから、一見、確かによく似ている。しかし、肝腎なことは、この二人は、内実が全く違うということである。Bloeckmanの映画製作は、金が目的である。また、Stahrのように、酒に酔って、人に弱点を見せるような所はないけれども、非常に陰険で酷薄な性格の持ち主である。Gloriaが、映画女優になることを望んだ時、Bloeckmanが手を貸すのは、Gloriaに希望を持たせて、最後に裏切ることにより、嘗て自分をないがしろにしたGloriaに、意趣返しをするのが目的であった。Bloeckmanを生み出したユダヤ人観と、Monroe Stahrを創造できるユダヤ人観とは、同じ作者のものとは言え、本質的に異なる、と考えざるを得ないのである。

AnthonyがBloeckmanに対して、典型的な差別感を持っていたことは明らかだが、Fitzgerald自身はどうだったのだろうか。Bloeckmanの描き方は、決して、読者の共感を得られるようにはなっていない。又、Bloeckmanの内面は描かれず、外から、観察されているだけである。*The Beautiful and Damned*におけるユダヤ人の描かれ方から判断する限

(4) Robert and Helen H. Roulston, *The Winding Road to West Egg: The Artistic Development of F. Scott Fitzgerald*, p. 99. 以下、同書からの引用は本文中にページ数のみ示す。引用文の日本語訳は引用者による。

りでは、作者にも、ユダヤ人差別感情があったと言うべきかもしれない。但し、忘れてならないことは、Anthonyが、Bloeckmanに対する差別感を露わにする時には、決まってAnthony自身も醜悪に描かれていることである。この時期におけるFitzgeraldは、アメリカの中にある、そして、自分自身の中にある、ユダヤ人差別感情を、自明のものとしているのではなく、ここには何か問題がある、という風に意識していたと考えるのは、Fitzgeraldに対して、評価が甘すぎるだろうか。

*Tender Is the Night*では、ユダヤ人問題は、殆ど出て来ない。但し、このnovelと非常に関わりの深い、“The Hotel Child”という短編の中で、Fitzgeraldは、ユダヤ人問題に関し、画期的な新しい方向を打ち出した。1930年11月に執筆されたこの作品で、Fitzgeraldは、初めて、ユダヤ人を主人公にして、差別される側に身を置く形で、ユダヤ人の心性を、内側から表出することを試みた。18歳のユダヤの娘Fifi Schwartzは、母親と兄との3人で、ヨーロッパのホテルを転々とする生活を続けているが、母親が、この生活に区切りをつけて、アメリカに帰ると言い出した時に、Fifiは“everybody is so bigoted there”⁽⁵⁾とアメリカを手厳しく批判し、帰国を拒む。また、homeという言葉に触発されて、彼女は、ユダヤ人であるが故の深い故郷喪失感を覚えるのである。

“So I think we better go back home.”

The empty word rang desolately in Fifi's ears. She put her arms around her mother's waist, realizing that it was she and not her mother, with her mother's grip on the past, who was completely lost in the universe (p. 605-6).

Schwartz家が、現在、長逗留しているホテルでは、この後、盗難事件と火事が続けざまに起きるが、盗難で被害にあったのがSchwartz家であるにも拘わらず、ホテルの支配人は、Fifiの兄Johnが犯人ではないかと疑い、火事については、Fifiが放火したのではないかと疑う。Fifiが、ホテルの他の逗留者にどのように見られていたかと言うと、アメリ

(5) F. Scott Fitzgerald, *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: A New Collection*, p. 605. 以下、同書からの引用は、本文中にページ数のみ示す。引用文の日本語訳は引用者による。

カ人の客の表現を借りれば、「星条旗に一本余計に付け加えられたストライプのように、存在すること自体が、アメリカに対する侮辱」(p. 600)ということである。そして、この作品は、一人のユダヤ女性が、ここヨーロッパにおいても、自分がユダヤ人であるが故に差別されていたことを自覚することにより、自己幻想を断ち切り、自らの判断力と行動力で、盗難事件の真犯人が、自分がすんでの所で駆け落ち結婚する筈であったハンガリー貴族であることを突き止め、自己救済と一家の名誉回復を果たす物語になっている。また、Fifiの母親も、興味深いユダヤ女性で、差別社会で生きることに對する諦念と自信のようなものを態度ににじませている。*The Beautiful and Damned*におけるBloeckmanは、白人主流派のエピゴーンとして生きることに終始し、後に、名前をBloeckmanからBlackに変えたが、いかにもユダヤ系という名前のSchwartzにも、blackという意味があることは、興味深い暗合である。

Fitzgeraldの作品におけるこのようなユダヤ人像の変貌や、それに伴う創作方法の転換は、やがては、*The Last Tycoon*におけるMonroe Stahrへと結実することになるが、それを論ずる前に、Fitzgerald文学における人種差別について考察する。

Fitzgerald文学における人種問題は、黒人差別が大部分である、と言ってよいが、*This Side of Paradise*の中では、殆ど出て来ない。⁽⁶⁾これは、黒人差別が無かったのではなく、*This Side of Paradise*に現われる黒人は、見えない人間 Invisible Manになっているからである。この作品にも、黒人は出て来るが、いずれもがウェーターのようなmenial jobで、登場人物としての存在感は実質的にゼロなのである。これはこれで、黒人差別の一つの表現の仕方になる、と言えると思う。

*The Beautiful and Damned*における例としては、アメリカが第一次大戦に参加し、Anthonyが応召した後、妻のGloriaが、自分も、赤十字の

(6) 人種差別的なエピソードを敢えて挙げるとすれば、Book 1, Chapter 2におけるCarnivalと題されたセクションの中に、ハワイの原住民と思われる女性をAmoryの仲間がからかう場面がある。

看護婦に志願しようと思ったものの、黒人の体をアルコールで洗ってやらなければならないという話を聞いて、急速に愛国心が失せてしまったという個所を挙げることができる。この作品でも、Gloriaのモラルと行動が様々に批判されるが、彼女の人種差別的な振る舞いが問題にされることは、ただの一度もないのである。

What would Anthony think if she went into the Red Cross? Trouble was she heard that she might have to bathe negroes in alcohol, and after that she hadn't felt so patriotic (p. 260).

*The Great Gatsby*では、既に何人かの研究者が指摘した同じ個所から引用する。

As we crossed Blackwell's Island a limousine passed us, driven by a white chauffeur, in which sat three modish negroes, two bucks and a girl. I laughed aloud as the yolks of their eyeballs rolled toward us in haughty rivalry.⁽⁷⁾

上記は、*Gatsby*の誘いを受けたNickが、二人で初めて、*Gatsby*の車でニューヨークに向かう場面であるが、問題にされてきたことは二つあり、一つは、buckという差別語の使用、もう一つは、黒人の表情の描き方が、ステレオタイプのということである。このbuckという言葉が、当時、どの程度、差別的な響きを持っていたのか、私には不分明であったが、Scott Donaldsonの著書を読み、当時の白人の間でも問題視されるほどの差別語であったことが理解できた。Donaldsonによると、Earl WilkinsというFitzgeraldの愛読者が、Fitzgeraldの短編“*No Flowers*”の中で、このbuckという差別語が再び使われた(*The Price Was High*, p. 531)ことについて、Fitzgerald宛ての手紙の中で、強く非難しているのである。⁽⁸⁾しかし、この個所で、私に一番問題と思われることは、語り手Nickが、声を出して笑ったということである。Nickが笑った直接的な理由は、ライバル意識を露わにした黒人の驚愕の表情がおかしかったからであろうが、その背後にあるものは、Nickの感覚では、黒人が白

(7) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (Oxford), p. 55.

(8) Scott Donaldson, *Fool for Love*, p. 187.

人を運転手にして、高級車を乗り回しているということ自体が、滑稽以外の何ものでもないということである。つまり、この作品における the American Dream というものは、言わば、the White American Dream とも言うべきもので、近年、この作品を the American Dream という概念と関連させて論ずることが、殆ど無くなったと思われるのも、恐らく、こういったことと関係している筈である。*The Great Gatsby*の中で想定されている the American Dream というものは、人種差別という点から言えば、現在の political correctness による批判に耐えるような概念ではないのである。

Tender Is the Night においては、黒人の取り扱い方が、やや変わったかなという印象が、無いわけではない。この作品では、Fitzgerald の novel において初めて character と呼びうる黒人が、パリで起きた一連の事件の中で登場する。⁹⁾ 事の発端は、Dick Diver の友人 Abe North が、パリのバーで、盗難事件の被害者になったことであるが、この結果として、Freeman という黒人が、犯人と間違われて、逮捕され、又、犯人探しに Abe North に協力した別の黒人 Jules Peterson は、Freeman 誤認逮捕へ関与した故に、仲間の黒人達に命を狙われる羽目になる。責任を感じた Abe North は、Freeman を救出しようと思い、また、Peterson を保護するため、彼を伴って Dick の宿泊するホテルへ行くが、そこでは丁度その時、Rosemary の部屋の中で、Dick が、Nicole に対する責任故に、Rosemary の誘惑を断ち切る決断をするという内面のドラマが演じられている所であった。一旦、皆で Dick の部屋に行き、Abe の話を聞くことになるが、Peterson が、遠慮して途中で一人廊下に出た後に、何者かに殺害され、彼の死体が Rosemary の部屋で発見されるところから、物語は全く意外な方向に進む。女優として、これからという、その大切な時に、Rosemary がスキャンダルで台無しにされるのを恐れた Dick は、

(9) “The Offshore Pirate”における白人 Curtis Carlyle と彼の黒人の部下達(特に Babe Divine)との連帯感・信頼感の描き方は、“Dice, Brass Knuckles & Guitar”における黒人 Hugo の描き方と合わせ、人種差別的偏見の強かった初期の Fitzgerald 文学における例外的な興味深い事例である。

まるで見境を失ったかのように、妻 Nicole にも手伝わせて、必死になって、黒人死体を隠すことに努めるのである。⁽¹⁰⁾ Abe North と黒人との間に、これまでの Fitzgerald 作品には、特に novel においては、殆ど存在しなかった新しい人間関係が成立するのかと、一瞬期待させたエピソードは、この黒人死体隠しの場面に窺われるように、結局、主人公 Dick Diver の甚だしい黒人蔑視を露わにする形で終わるのである。*Tender Is the Night* の第 1 部は、Nicole の狂気が再発するところを Rosemary が目撃するという衝撃的な場面で終わるが、Nicole の病の再発のきっかけになったのは、彼女が、黒人の死体を隠す手助けを、夫 Dick に強いられたことにあったのである。⁽¹¹⁾

黒人差別に関わる個所として、*Tender Is the Night* からもう一つの例を引用する。

Nicole reproved him when they were in their room alone.

"Why so many highballs? Why did you use your word spic in front of him?"

"Excuse me, I meant smoke. The tongue slipped."

"Dick, this isn't faintly like you."

"Excuse me again. I'm not much like myself any more" (p. 335).

上記は、Abe North の死後、Mary North が再婚した大富豪 Conte di Hosain Minghetti の城に、Diver 夫妻が招待され、ディナーの終わった後、自分達の部屋に戻って、二人だけで話をしている場面だが、ディナーの席で、Dick が差別語を使ったことが、Nicole に咎められている。spic という言葉は、この時代では、スペイン人を表わすことが普通だったが、ホストがイタリア人の可能性があるので、その場合にはイタリア人に対する差別語になりうる。咎められて、Dick は弁明する。「口が滑ったんだ。実は、smoke というつもりだった。」smoke という言葉は、

(10) 学会発表の場で参照したハンドアウト 9 において引用した Dick の台詞 "it's only some nigger scrap" (*Tender Is the Night*, p. 145) について、発表時に私は、黒人の死体を指すと述べたが、再読して読み誤りに気が付いた。nigger scrap は、黒人の喧嘩の意であろう。

(11) Nicole の病に対する配慮ゆえに、Dick は意識する罪 (Rosemary との不倫) を拒むが、無意識の罪 (黒人蔑視) 故に、結局は、妻 Nicole の病を再発させてしまったことになる。

黒人を表わす差別語である。白人に対する差別語はまずいけれども、黒人に対する差別語はかまわないという意味なのであろうか。Dickの最後の台詞“Excuse me again”は、smokeと言おうとしたこともまずかった、と言い直したと受け止めてよいのだろうか。

*Tender Is the Night*において、特に、主人公Dickの示す黒人差別には、甚だしいものがあるが、作者のポジションは、*The Great Gatsby*におけるように、あっけらかんとした、無自覚の黒人差別とは、ニュアンスが異なるように思われる。丁度、*The Beautiful and Damned*の主人公Anthonyが、激しいユダヤ人差別をしながらも、作品全体としては、そこに問題があることを窺がわせていたように、*Tender Is the Night*では、主人公Dickに黒人差別をさせながらも、同時に、差別の問題性が、Fitzgeraldには、意識されている書き方であるように思える。

結局、Fitzgeraldにとって、黒人とは、どういう存在として意識されていたか。これを端的に表わしている作品が、1930年3月に、Josephineシリーズ2番目のストーリーとして執筆された“A Nice Quiet Place”であると思う。この作品では、女子学生Josephine Perryが、夏休暇を、A Nice Quiet Placeと呼ばれるような辺鄙で退屈な田舎で過ごすことになるが、そこで、思いの外、美男子のSonny Dorranceに出会い、すぐに恋に落ちる。Josephineに慕われて、迷惑に思ったDorranceが、彼女を諦めさせる為に使った手段が、自分には黒人の妻がいる、という嘘であった。しかも、Fitzgeraldは、このプロットを、一種の笑い話の文脈の中で使っている。いかに甚だしい黒人蔑視が、このプロットの中に含まれているかということに、Fitzgeraldが全く気付いていないのは、明らかである。

ところが、*The Last Tycoon*になると、黒人の扱い方が、コペルニクスの転回を遂げた、と言いたくなるほど、大きく変化するのである。最後のFitzgerald heroであるMonroe Stahrが、どういう意味で新しいheroなのかと言えば、作者が、初めて本格的にその内面から描こうとしたユダヤ人である、ということだけでも、十分ユニークなのであるが、それ

だけではなく、Fitzgerald文学の中で、初めて、黒人を自分と対等の存在と認めた唯一人の人物であるということである。

StahrとKathleenが、サンタモニカ近辺の海岸に面した家で初めて結ばれたところを、言わば、*The Last Tycoon*のクライマックスとすれば、むしろ、注目したいのは、事後、二人が、浜辺を散策する場面である。二人が浜辺に出るきっかけになったのは、その時が、たまたま、grunionと呼ばれる魚の大群が、一年に一度、産卵のために、カルフォルニアの海岸に押し寄せる時間に当たっており、窓から見える夜の海岸が、異様に輝いていたからである。浜辺で、Stahrは、grunionを拾い集めている黒人と出会い、話を始めるが、この黒人は、Emersonを愛読するインテリで、Stahrが映画製作者であることを知ると、手厳しい映画批判を始める。注意したいことは、黒人の批判を受けた後のStahrの反応である。Kathleenは、これまでのFitzgerald作品の登場人物と同様に、黒人をSamboという差別語で呼ぶが、Stahrは、そのような差別的な呼び方を拒否する。

“Poor old Sambo,” she said.

“What?”

“Don't you call them poor old Sambo?”

“We don't call them anything especially.”⁽¹²⁾

上記引用個所の直前に、この黒人は、バケツいっぱいのgrunionを手に浜辺から去る時、「自らは知らずして、映画産業を揺るがした」(p. 93)と書いてあるが、その具体的内容は、少し後に記されている。

Also, and persistently, and bound up with the other, there was the Negro on the sand. He was waiting at home for Stahr with his pails of silver fish, and he would be waiting at the studio in the morning. He had said that he did not allow his children to listen to Stahr's story. He was prejudiced and wrong and he must be shown somehow, some way. A picture, many pictures, a decade of pictures, must be made to show him he was wrong. Since he had spoken, Stahr had thrown four pictures out of his plans—one that was going into production this week. They were borderline pictures in point of interest but at least he submitted the

(12) F. Scott Fitzgerald, *The Love of the Last Tycoon: A Western*, pp. 93-4. 以下、同書からの引用は、本文中にページ数のみ示す。引用文の要約と日本語訳は引用者による。

borderline pictures to the Negro and found them trash. And he put back on his list a difficult picture that he had tossed to the wolves, to Brady and Marcus and the rest, to get his way on something else. He rescued it for the Negro man (p. 96).

まず、その黒人の姿が、Stahr の obsession になってしまい、Stahr は、何としてでも、この黒人の批判に対し、自分の仕事を正当化しなければならないと考えるようになる。その結果として、Stahr は、黒人の映画批判を真剣に受け止め、最近の自分の映画製作の現状に対して省察し、今週にも製作に入ることになっていた映画を取り消し、また、難解であるが故に一度は周囲の圧力に妥協してお蔵入りを許した映画を復活させる等、映画製作の予定を大幅に変更したのである。しかも、これら全ては、浜辺で偶然出会った名も知らぬ黒人の映画批判に答えるためであった。ここが、人種差別を克服する過程での、Fitzgerald 文学の到達点であった、と言えるのではないか。

次に考えたい問題は、6年前の *Tender Is the Night* に比べても、黒人の扱い方が、*The Last Tycoon* では、あまりにも違いすぎる、ということである。突如として、黒人を人間として対等に扱う作品を書いた、という印象が強い、と言わざるを得ないのである。

Fitzgerald は、1930年代に、彼が、黒人差別的な姿勢を変化させつつあった、ということを実証するようなエッセイを二つ書いている。その一つは、1933年3月 *Saturday Evening Post* に発表された“*One Hundred False Starts*”で、創作においても、生活においても、挫折寸前に陥った Fitzgerald が、「事態が非常に悪くなって、出口無しというような時、あなたはどうか」と、アラバマの老いた黒人にアドバイスを求めたところ、ありきたりの返事しか期待していなかった Fitzgerald は、「Mr. Fitzgerald, そういう時には、私は仕事をします (“Mr Fitzgerald,” he said, “when things get that-away I wuks”）」⁽¹³⁾ という黒人の答えに感銘を受けたことを記している。もう一つは、1936年4月に *Esquire* に発表

(13) F. Scott Fitzgerald, *Afternoon of an Author*, p. 173. Scott Donaldson が前掲書 (p. 187) で言及。

された“Handle with Care”で、その最後のパラグラフにおいて、Fitzgeraldは、自分の現状を黒人の苦境になぞらえている。

I shall manage to live with the new dispensation, though it has taken some months to be certain of the fact. And just as the laughing stoicism which has enabled the American Negro to endure the intolerable conditions of his existence has cost him his sense of the truth—in my case there is a price to pay.⁽¹⁴⁾

この二つのエッセイに共通することは、Fitzgerald自身の生の困窮の深まりが、彼をして、黒人理解を深める方向に、向かわせていることである。こうした方向転換の延長上に、*The Last Tycoon*における、新しい黒人観が生じるのは理解できることであるが、それだけに、こうした転換を示唆するような作品が、*The Last Tycoon*執筆まで、全く書かれなかったとしたら、むしろ不思議、と思わざるを得ないのである。⁽¹⁵⁾

Fitzgerald文学における人種差別については、いくつかの先行研究があるが、これまで殆ど議論されて来なかった問題が二つある。このことと上記の疑問とは深く関係していると思われるので、まず、その一つ、Fitzgerald文学における黄色人種差別の問題から考えてみたい。

1919年12月に執筆された“*Myra Meets His Family*”というFitzgeraldの短編があるが、この作品では、Myra Harperという若い女性と婚約したKnowleton Whitneyという金持ちの青年が、Myraに結婚を断念させる為、ある入念なトリックを使うことになるが、そのトリックの目的は、彼女に、彼の曾祖母が中国人であると思込ませることであった。前述した“A Nice Quiet Place”と、プロットの要が、実によく似ているのである。Fitzgeraldの文学においては、金の問題が、愛や結婚を阻む壁になるという形で、数多くの議論が繰り返されてきたが、その壁が、どん

(14) F. Scott Fitzgerald, *The Crack-Up*, p. 84. Cf. Alan Margolies, “The Maturing of F. Scott Fitzgerald,” p. 88.

(15) 黒人を主人公とするFitzgeraldの唯一の作品“Dearly Beloved”は、執筆時期が1940年初めと確定されている。

なに厚く、また高く立ちはだかっていても、それは相対的なものである。結婚を阻む絶対の壁は、人種差別の壁なのである。Fitzgerald文学における人種差別は、結局は、結婚できるかどうかという問題をめぐって、最も根源的な形で現れるのである。そして、この点では、Fitzgeraldにとって、黒人種と黄色人種との間に、本質的な差は無かった、と考えてよいように思える。

Fitzgeraldは、Zeldaと結婚して3ヵ月後、新居のあるコネティカット州 Westport から、Zeldaの実家のあるアラバマ州 Montgomery まで、車で旅行をしているが、その時の旅行記を“The Cruise of the Rolling Junk”というタイトルで発表している。

“O thou beyond surprise,” I said to Louie, “give me a room and a bath for self and wife. We journey to the equator in quest of strange foods and would sleep once more beneath an Aryan roof before consorting with strange races of men such as the cotton-tailed Tasmanians and the pigmies.”⁽¹⁶⁾

上記引用箇所は、Fitzgerald夫妻が、途中で、プリンストンに立ち寄り、Nassau Innというホテルでチェックインしている場面であるが、アリア人の屋根の下、これは、Nassau Innを指すだろうが、アメリカ南部の黒人をタスマニア人に例えている所が興味深く思える。*The Beautiful and Damned*の中でも、Anthonyが、冗談として、沿岸警備隊員の見事に日焼けした肌に魅惑された金持ちの娘が、駆け落ちした後で、その隊員にタスマニア人の血が入っていることを知った、と言って嘔き出す場面があるが(p. 44)、これが、冗談になるのは、タスマニア人の血が結婚の差障りになるという暗黙の了解があるからである。Fitzgeraldには、黄色人種も黒人種も、白人とは完全に隔絶した、本質的には同類の有色人種としてイメージされていたと考えられる。

Fitzgerald文学における人種差別との関わりで、これまで、議論されて来なかったもう一つの問題とは、Fitzgeraldの全著作物に対する、た

(16) F. Scott Fitzgerald, *The Cruise of the Rolling Junk*, p. 58.

だ一人の著作権者であったScottieによるテキスト隠しである。Bruccoliは、1979年に、Fitzgeraldの短編小説でまだ書物の形で刊行されていないもの全てを集めて*The Price Was High: The Last Uncollected Stories of F. Scott Fitzgerald*を出版したが、この時、著作権者の意見により、質が劣るという理由で、8編の作品が除外され、更に、収録された2作品において、一部削除がなされた。私は、除外された8編と、一部削除された2作品の初出を読み、著作権者の別の動機を感じた。一部削除された作品とは、“Two for a Cent” (April 1922 / *Metropolitan Magazine*) と “Zone of Accident” (July 13, 1935 / *The Saturday Evening Post*) であり、除外された8編のリストは脚注に記す。⁽¹⁷⁾ 2000年始めに刊行されたCambridge版 *Flappers and Philosophers* は、“Two for a Cent”の初出を初めて復元して収録しているが、Introductionで、一部削除された事実に触れ、テキストの人種差別的言辞の故であったろう、と書いている。⁽¹⁸⁾ アメリカで公にこのように言われたのは、恐らくこれが初めてと思われるが、私は、Cambridge版よりもわずかに早く、この問題に触れ、“Two for a Cent” と “Zone of Accident” とにおいて、一部削除が施されたのは、人種差別に関する言説を隠蔽することが目的であったこと、更に、除外作品に関しても、そのいくつかについては、著作権者の同じ動機が働いていることを論じた。⁽¹⁹⁾ *The Price Was High* に収録される時に、“Zone of Accident” から削除された部分とは、初出の最初のページにおける “Why is it niggers never know they're sick until after dark?” 以下全部で50字(words)である。

著作権を行使して、これまでのFitzgerald研究に様々な影響を及ぼし

(17) 1. “Shaggy’s Morning,” *Esquire*, III (May 1935). 2. “Send Me In, Coach,” *Esquire*, VI (November 1936). 3. “The Honor of the Goon,” *Esquire*, VII (June 1937). 4. “The Count of Darkness,” *Redbook*, LXV (June 1935). 5. “The Kingdom in the Dark,” *Redbook*, LXV (August 1935). 6. “Gods of Darkness,” *Redbook*, LXXVIII (November 1941). 7. “The Passionate Eskimo,” *Liberty*, 12 (8 June 1935). 8. “Strange Sanctuary,” *Liberty*, 16 (9 December 1939).

(18) F. Scott Fitzgerald, *Flappers and Philosophers* (the Cambridge Edition), xxiii.

(19) 内田 勉 「F.スコット・フィッツジェラルドのプリンストン時代再考」【学習院大学研究年報】46 (1999), p. 24.

てきたScottieという人の思想や行動、性格等は、Scottieの娘Eleanor Lanahanの書いたScottieの伝記によって、今では、具体的に知ることが出来る。この伝記によると、1976年、これは*The Price Was High*が刊行される3年前に当たるが、巨額の著作権料を手にしたScottieは、二つの事業に乗り出している。一つは、彼女の両親FitzgeraldとZeldaの再埋葬である。除外作品のリストに掲げた4, 5, 6は、Philippe 4部作といわれるシリーズ物で、第1作の“In the Darkest Hour”のみが、*The Price Was High*に収録されている。このシリーズは、反カトリック的な内容を持つわけではないが、次第に異教的な要素が強まってくるので(主人公Philippeの危難を最後に救うのはwitch cultの女性リーダーである)、カトリック教会にとって、快く受け入れられる作品ではありえない。Scottieが、Philippe 4部作の内、異教的要素が現われていない第1部のみを収録して、あとは全て除外した動機には、両親の再埋葬を許可してくれたカトリック教会に対する配慮があったのではないかと私は考えている。

リストの1番目“Shaggy’s Morning”は、犬の視点で人間社会を観察した興味深い作品であるが、「いくら犬だからといっても、niggerを主人にしたりはしない(I’m not one of these diggities that think their boss is God even if he’s an old nigger)」というような差別的言辞がある。

3番目の“The Honor of the Goon”は、白人学生達に差別されるマレー人の女子学生が、白人に復讐する物語で、注目したいことは、Fitzgeraldの意識が、差別される側に置かれているため、差別語を使われる側の心の痛みと憤りの大きさ、又、差別語を使う側の無頓着さが、対比的に、ありありと分かるように書かれていることである。但し、この作品は、最後の復讐の場面で、差別される側の抗議や怒りの表現が、目を覆いたくなるようなおぞましい形になってしまい、かえって、東洋人の不気味さや残忍さが、強調されてしまったのではないかと、という後味の悪い印象を残す。

Fitzgerald文学における人種差別という文脈では、除外された8作品

の中で、7番目の“The Passionate Eskimo”が、一番注目できる作品である。この短編は、白人文明社会に入り込んで来たエスキモー Pan-e-troon がパライアとして差別され、犯罪を疑われるに至るが、最後には自らの知恵と力を発揮して、不眠不休の働きをなし、憧れの女性の大切な宝を守り抜き、白人の真犯人を捕らえ、自らの名誉を挽回する物語で、“The Hotel Child”によく似た結構を持っている。確かに、この作品における白人のエスキモーに対する差別感には甚だしいものがある。しかし、作者は、明らかに、差別する側ではなく、差別される側に立って、白人支配のアメリカ社会を見ていることを見落としてはならない。だからこそ、“The Hotel Child”において Fifi にアメリカ社会の偏見を批判させたように、Pan-e-troon には、エスキモーの視点から、アメリカの過剰な消費文明を批判させたのである。

He (Pan-e-troon) stopped now and then to stare into shop windows, but they held such a surfeit of charms as to be confusing. So with lingering sighs he went on in the direction of a tall building...⁽²⁰⁾

1976年における Scottie のもう一つの事業とは、彼女の居住するアラバマ州の知事を4期務めた、人種差別主義者として名高い George Wallace が、大統領選挙に出馬したために、Scottie が始めた反 Wallace キャンペーンである。元々、民主党の活発なメンバーとして、反人種差別運動に積極的に関わったことのある Scottie であったが、この時も、Wallace project と自ら名付けたキャンペーンに、私財を投じ熱心に活動した。Fitzgerald の娘ということで、常に、特別な存在として扱われてきた Scottie にしてみれば、こうした政治活動に関わる時に、人種差別的な言葉の頻出する Fitzgerald の作品が、新たに人の目に触れるような機会は、できれば、無いに越したことはない、と考えたとしても、不思議ではない。著作権者 Scottie が、Fitzgerald 文学に現われる人種差別的言辭に、異常なほど神経質で、時には、テキスト隠しを行なった動機は、

(20) F. Scott Fitzgerald, “The Passionate Eskimo,” *Liberty*, 12, p.12.

彼女が言うような、作品の質の問題とは別の所にあった、と私には思われる。

“The Honor of the Goon”や“*The Passionate Eskimo*”において、Fitzgeraldは、人種差別される側に視点を移して、彼にとって、新しい文学の試みをした、と言えるが、ここで、先述した、Fitzgeraldにとっては、黒人種と黄色人種は本質的に同じイメージで捉えられていたということを結び付けると、*The Last Tycoon*において初めて示された、新しい黒人観に至る道は、既にはっきりと付けられていたと言えるのではないか。

*This Side of Paradise*の主人公は、自分はパライアである、という自己認識を述べているが、Fitzgeraldの文学は、出発点からして、パライアの文学であった。しかし、*Tender Is the Night*までは、富や地位を持つ階級に疎外感を抱くという意味でのパライアである。1930年以降、Fitzgeraldが連続して経験した不運や挫折は、Fitzgeraldに、自己と社会に対する認識の変革を迫ったが、こうした事態に応ずる形で、創作活動を続けていく時に、アメリカ社会における本当のパライアに対する認識をも改めていったのではないだろうか。“*The Hotel Child*”や“*The Passionate Eskimo*”という作品は、Fitzgeraldが、初期に顕著であった民族差別・人種差別的姿勢を後期に至って、転換させたことを示している。こうしたプロセスを経て、アメリカ社会における本当のパライアの文学、少なくとも、それを取り込んだ文学として構想されたのが、*The Last Tycoon*だったと言えないだろうか。*The Last Tycoon*は、未完に終わったが、民族・人種差別問題に関し、Fitzgeraldが最後に、どちらの方向をめざしていたかは、これまでの論述で明らかにできたと思う。

Bibliography

Primary Sources

- Fitzgerald, F. Scott. *Tender Is the Night*. New York: Scribners, 1934.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Crack-Up*. Ed. Edmund Wilson. New York: New Directions, 1945.
- Fitzgerald, F. Scott. *Afternoon of an Author*. Ed. Arthur Mizener. New York: Scribners, 1958.
- Fitzgerald, F. Scott. *F. Scott Fitzgerald: In His Own Time*. Ed. Matthew J. Bruccoli and Jackson R. Bryer. New York: Popular Library, 1971.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Basil and Josephine Stories*. Ed. Jackson R. Bryer and John Kuehl. New York: Charles Scribner's, 1973.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Cruise of the Rolling Junk*. Bloomfield Hills, Mich. & Columbia, S. C.: Bruccoli Clark, 1976.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Price Was High: The Last Uncollected Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: A New Collection*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Charles Scribner's, 1989.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Love of the Last Tycoon: A Western*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Fitzgerald, F. Scott. *This Side of Paradise*. Ed. James L. W. West III. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Fitzgerald, F. Scott. *F. Scott Fitzgerald: The Princeton Years Selected Writings 1914-1920*. Ed. Chip Deffaa. Fort Bragg, Calif.: Cypress House Press, 1996.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Beautiful and Damned*. Ed. Alan Margolies. New York: Oxford University Press, 1998.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. Ed. Ruth Prigozy. New York: Oxford University Press, 1998.
- Fitzgerald, F. Scott. *Flappers and Philosophers*. Ed. James L. W. West III. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.

Secondary Sources

- Cross, Barry, and Eric Fretz. "What Fitzgerald thought of the Jews: Resisting Type in 'The Hotel Child.'" *New Essays on F. Scott Fitzgerald's Neglected Stories*. Ed. Jackson R. Bryer. Columbia: University of Missouri Press, 1996. 189-205.
- Donaldson, Scott. *Fool for Love: F. Scott Fitzgerald*. New York: Congdon and Weed, 1983.
- Forrey, Robert. "Negroes in the Fiction of F. Scott Fitzgerald." *Phylon: The Atlantic University Review of Race and Culture* 28 (1967): 293-98.
- Gross, Seymour L., and John Edward Hardy, eds. *Images of the Negro in American*

Fitzgerald 文学における民族・人種差別 (内田)

- Literature*. Chicago: University of Chicago Press, 1966.
- Hindus, Milton. "F. Scott Fitzgerald and Literary Anti-Semitism: A Footnote on the Mind of the 20's." *Commentary* June 1947: 508-16.
- Lanahan, Eleanor. *Scottie The Daughter of ...: The Life of Frances Scott Fitzgerald Lanahan Smith*. New York: Harper Collins, 1995.
- Margolies, Alan. "The Maturing of F. Scott Fitzgerald," *Twentieth-Century Literature* 43 (1997), pp. 75-93.
- Roulston, Robert, and Helen H. Roulston. *The Winding Road to West Egg: The Artistic Development of F. Scott Fitzgerald*. Lewisburg: Bucknell University Press, 1995.
- West, James L. W. III. "Prospects for the Study of F. Scott Fitzgerald" *Resources for American Literary Study* 23 (1997), pp.147-58.

(英米文学科 教授)